J. G. Andersson ;
Prehistoric Sites in Honan (河南)
(The Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm. Bulletin No. 19, 1947.)

本書は中國先史時代研究の上に輝かしい曙を告げた河南省澠池縣の仰韶遺跡を中心として、兼て附近の不招棗遺跡及び同省河陰縣にある數ケの遺跡の正式な調査報告書である。尤もこれらの遺跡に就ては、既に博士が屢々言及された所で、又關係の彩陶の資料は、アルネ博士の「中國河南の着色陶器」に於て記述されて居るので、今回の報告書で全く新しい資料と考えられるものは極めて乏しく、ただ從來の資料がより多數に、又より詳細に報告せられたと言うに過ぎず、圖版・論考共にまた從來のものと重複した點が多い。そこで、この紹介に於ては、それ〴〵の内容を擧げるよりも最も重要と考えられる事實及び問題に限ることにする。

さて本書に記載されてゐる遺跡の内、博士が親しく發掘されたのは仰韶遺跡に止まり、不招棗は發掘中に一度訪問したに過ぎず河陰縣の諸遺跡は從者を派遣して資料の蒐集を行わしめたに止つている。從つて本書の内容も仰韶が中心であり、又學術的價値も仰韶が主たることは當然である。この仰韶遺跡の組織的發掘が行われた個々の箇所、及びその發掘の經過が今回の報告書に於て明らかにせられたのは先ず重要視すべきである。その發掘箇所は十七ケ所を數えて、大體に於て谷や道路の近くの發掘に便利な場所が選ばれている。その内、墓址二ケ所、所謂井戸の遺構が二ケ所を除いてその他の通常のトレンチはあまり大きなものでなく、最長の一つが二十米と云うから、通じて小地域の發掘である。後に從者を派遣して發掘せしめた場所が二ケ所あるが、これは大體の位置しか分らない。前述の十七の發掘箇所はすべて地圖上に明記されてある。されば仰韶遺跡に關する博士の知識は、以上の發掘の結果、及び道路による文化層の切斷面の觀察より成り立つているわけである。

この仰韶遺跡を始めとする博士の河南・甘肅に於ける業績は、中國の考古學者を刺戟し爾來各地で先史時代の遺跡が續々と發掘調査されて、種々の新事實の發見が報ぜられたが、その内、最も重要なものは、山東省の城子崖に於ける黑陶遺跡の發見、及び殷墟の後崗に於ける彩陶・黑陶・白陶の層位的序列の檢出であらう。なほ彩陶・黑陶の層位を異にすることは他の數ケの河南省の遺跡に於ても檢出された。右のうち前者の問題に對し、黑陶が實はこの仰韶に於ても存在していたことを "The Prehistory of the Chinese" (BMFEA. NO. 15) に於て發表せられた博士は、今回の報告書に於ては、仰韶に於ける層位的な觀察の詳細を述べて居る。即ち、混亂を經た可能性の最も少いと考えられる發掘箇所第二及び第三は主として層位の確認のために調査が行われたものであり、墓址たる發掘箇所第十二に於ては、遺骸の存在した層の

發見物が詳細に記述されている上に、更にその層より下の發掘が行はれたのであつた。發掘箇所第二に於ては、地表下三・一五米迄が六層に分つて調査されたが、こゝでは文化土が厚く、なおその底部に迄達していない。第三に於ては地下一・四米で文化層は終つて居り、これは二層に分けて發掘したとある。第十二に於ては遺骸の存した層より更に下が一米前後發掘されて居て、これは主として遺骸の有無の檢出のため掘られたのであるが、すべての出土遺物の記載があつて、層位的觀察に一資料を提供して居る。かくてこれらの觀察から結論されるのは、彩陶系と黑陶系との二種の遺物が、仰韶にあつては層位的に上下の差が認められないという事實であつて、後崗等に於ける觀察の結果と相反するものである。山西省などに於ては、かゝる層位の混合狀態が認められて居るので、仰韶のこの事實も亦眞實性を示すものと云わねばならぬ。ただ他方に於て、その附近に全く彩陶の認められない不招寨の遺跡があり、而も出土の土器が仰韶のそれと極めて時代の近いものであることや、又、上に述べたこの仰韶に於ける層位的發掘が、實は必ずしも十全のものとは云い難いからなお問題を殘すものと見られるであろう。この點で博士も亦、この層位的事實の確認のために、中國の學者が仰韶の遺跡を再發掘することを希望されて居るのである。併しこの仰韶及び不招寨の正式な報告が發表された今日では、兩遺跡出土遺物の精密なる比較から、仰韶遺跡が果して單一なる時期に屬するものであるか否かは必ずしも考究不可能な事ではなく、これは我々に課せられた興味ある問題の一つであることが思われるのである。

次に新しく發表せられた資料としては、發掘箇所第十二、即ち墓址の近くで發見せられた一聯の遺物がある。これは十五ケの小型の壺又は筒形土器であつて、五十糎平方程の場所に密集して遺存してゐた。これらの遺品は、高さ五糎から八糎ほどのもので、到底實用に供せられたものとは考えられず、またその形は彩陶とは全然似て居ない。更にこの附近より、高さ四糎から八糎ほどの圓錐形の土製品がこれ亦群をなして發見されている。即ち兩者は、その出土狀態から、副葬品でないことは確實であるが、何か墓地に關係ある祭祀の道具であるか、又は、墓地に關係は無いとしても、何か宗教的な行事に關係のあるものと推定せられているのである。

仰韶遺跡についで不招寨の遺物にあつてはとりたてて、新資料として紹介するものに乏しい。たゞ、博士が觀察せられた限りでは、仰韶に於て多數に見出される所謂"Pocket"が此處では全く認められなかつた事實と、調査は行われなかつたが、渑池縣城から仰韶村に至る道路の近くと、渑池縣城近郊に於て、都合二ケ所、不招寨と同樣の遺物を出す遺跡の存在することが報ぜられ、この種の遺跡が豐富であることが推定されているのは記すべきであろう。

河陰縣の諸遺跡は大體遺物の紹介のみであるが、それは秦王寨・池溝寨・王家溝・Min Kou Yu の四ケ所である。掲載せられた地圖によるとすべて黃河の河原に面した台地上に存在するようで、立地の條件は甘肅省の洮河流域の諸遺跡に通ずるものがある樣に思はれる。これらの遺跡は、出土の彩陶の文樣よりして、仰韶よりやゝ時代の下るものである

と推定されて居る。なおこゝで注意を引くのは、Nin K'ou Yü に於て、弧線文土器の破片が採集せられていることであつて、同様の文様は赤峯紅山後の遺跡をはじめ、滿洲の彩陶に伴出する無彩文土器の文様の特徴をなすものであり、從來は中國本土に於ては未だ發見されて居ないものである。

以上の報告の最後に博士は總括として、これら各遺跡の相互關係、及び、甘肅彩陶との關係を論じている。しかしその所見たるや從來と變りがなく、不招寨は仰韶より時期が遲れること、河陰縣の諸遺跡は仰韶よりやゝ下るものなること、更に甘肅仰韶期と河南の仰韶期とは同時代であり、河南に於てはその後の歴史の進展の結果、彩陶が割合早く消滅したのに對し、甘肅に於ては、その後も繼續して西紀前五百年頃迄彩陶が存在したという推定を再び繰返しているにすぎない。之を要するに中國先史時代研究史の第一頁を飾るべき仰韶遺跡が、かくの如くにしてその全貌が明かにせられ、なお考究の餘地を殘しながらも今迄やゝ不明瞭であつた各種の問題の焦點が一層明瞭になつたのは我々の大きな喜びである。

――藤澤長治――

井上光貞著
日本古代史の諸問題

井上光貞――この俊秀を謳われる若き古代史家について今更紹介する要はあるまい。昭和十八年史學雜誌に「王仁の後裔氏族とその佛教」を發表して以來、古代の社會史と佛教史の兩領域にわたつて劃期的な力作を次々と公にせられた氏の存在は、日本史に關心をよせるほどの者ならば、誰一人看過し得なかつたに違いないからである。今回、氏の數多い論稿のうちから日本の古代社會に關するもの六篇――一、「部民の研究」（新日本史講座第四回所收）二、「大和國家の軍事的基礎」（未發表）三、「氏族制に關する二つの理論」（日本歴史、昭和二三年四月）四、「大化改新史研究史論」（日本古代社會、I）五、「庚午年籍と對氏族策」（史學雜誌、五六編三號）六、「古代史學界の最近の業績」（史學雜誌五六編一〇號、歴史學研究一二七號）――が集成せられ、清新の裝を凝らして我々の机邊に贈られたことは、學界の喜びたるを失わない。

さて本書を概觀するに、第一、二、五の論文はそれ〴〵標題とする問題についての氏自身の研究であるが、第三、四、六の論文は過去の研究の整理と批判とを內容としている。このような研究史の重視は、恐らく氏が「古代史の研究にとつては他の分野以上に、研究史が重要な要素となつていると考える」（三二四頁）ところから來るのであつて、氏の堅實な學風を形成する一つの因子となつているのであるが、氏の研究のうちにそれら先人の業績がいかに見事に攝取され展開されているかは、以下に述べる所から自ら明かになることと思う。本書の內容についてはすでに竹內理三氏の行き屆いた批評が史學雜誌五八編五號に載せられている。本欄は紙數も限られていることであるし、全般の紹介はそれに讓り、私は井上氏の方法論を中心として古代史研究史上における本書の位置づけを試みたい。

（A）出發點　古代史と言つても本書の扱う所は大和朝廷成立以後大化改新に至るまでの時代を中心としている。この分野における近